

木造馬頭觀音立像



〔指定年月日〕平成一九年三月一五日
〔種別〕有形文化財（彫刻）
〔名称〕木造馬頭觀音立像
〔点数〕一軀
〔所有者等〕慈宏寺
〔所在地等〕宮前三―一―三

木造馬頭観音立像

本像は、雲渦文円形の光背を背負い、蓮華座上に直立する一面三目多臂の像である。通常の馬頭観音に見られる忿怒相ではなく、極めて穏やかな面部は三目を彫眼につくり、頭部天冠台の周囲に小さな化仏一面を配し、頭頂に精巧なつくりの馬頭をおく。多臂のうち胸前で合掌する手、香盒を捧持する手の他、脇手は左右各一手掌上にむけて張り出す。掌に日天・月天、宝棒、錫杖を持物としている。肉身部に金泥が塗られ、衣の部分が黒色であるのは表面の塗装が剥げ下地漆が変色したものと考えられる。冠飾は傷みがなく、美しく整っている。台座は円形二段魚鱗葺の蓮華に敷茄子二弁形の反花をそなえる。体軀部は一材、両脇多臂部分は別材である。

現存する馬頭観音は経軌に説かれた四面八臂や三面六臂の像がほとんどであり、本像のように一面千手観音と馬頭観音が合体したような作例は珍しく、研究資料としても価値が高い。

また、本像は、区内松庵村にあった天台宗の円光寺（松庵稻荷神社の西隣）の本尊であったものといわれており、『新編武蔵風土記稿』の松庵村の項には、「円光寺、（中略）、本尊観音木ノ立像長一尺四寸許」と記されている。円光寺は明治初年に廃寺となったが、明治十一年（一八七八）に慈宏寺が火災で伽藍を焼失したため、旧円光寺の本堂を移築したといわ

れており、その際に円光寺の本尊であったこの馬頭観音も慈宏寺に移されたものと伝えられている。本像は廃寺となった円光寺の資料としても貴重な作品である。

【文化財所在地】

